

2022年9月11日 聖霊降臨節第15主日礼拝

メッセージ「人と人をつなぐもの」

牛田匡牧師

聖書 コリントの信徒への手紙 I 12章31節-13章13節

「人と人をつなぐもの」と言われた時、皆様は何を想像されるでしょうか。仕事や商売をされている方だと、すぐに「お金」を連想されるかもしれません。確かに、様々な商品もサービスもお金を介して、人から人へと提供されていきます。しかし、そのようなお金とモノの交換だけが「人と人をつなぐもの」なのではないでしょうか。もしもそうなら、まさに「金の切れ目が縁の切れ目」となってしまうのではないかと思います。ですが、実際には「お金」だけでは説明がつかないことも、たくさん起きているのが現実ではないでしょうか。

例えば、私たちの教会で毎月行っている釜ヶ崎のホームレスの方々へのおにぎり作りのボランティア活動があります。おにぎりをお渡しする際に、お金を頂くわけでもありません。毎回、60人や80人という多くの方々が、西成警察署のすぐ裏にある四角公園に並び、私たちがおにぎりをお渡ししていきます。無言で受け取られていく方もおられますが、中には「ありがとう」と言ってくれる方々もおられます。私たちができること、やっていることは本当に小さなことですが、それでもそのことを心にとめて、お米や梅干しを献品して下さる方々もおられます。それは「お金のつながり」をこえたつながりではないでしょうか。またここ数年間ですっかり市民権を得て、全国各地で実施されるようになった、いわゆる「こども食堂」もそうだと思います。お金を介した損得勘定ではなく、ただ多くの方々の気持ちによって支えられて、それらの活動が全国で広く行われています。

そのようなボランティア活動だけに限らず、私たちの行動原理というものの自体がそもそも、頭で考える損得よりも、気持ちの部分、感情の部分に拠っている方が、意外と大きいのではないかと考えています。ニュースを見ていると、良いことでも悪いことでも、「どうしてこんなことが起こったのか」と驚くことがよくありますし、私たちの身近な所でも、「損か得かという、損でしかないけれども、やらずにはられない。どうしてもやってしまう」という、そんなことがあるのではないかと思います。

そして、聖書に記されている神様の行動原理もまた、それと同様でした。神様は「私は自分が共感してしまう者の苦しみを共感し、心が動いてしまう者の痛みに関心を動かす」(ローマ9:15=出33:19)とご自分の行動原理を語られています。またイエス様の行動原理も「はらわたをつき動かされる(スプラングクニツォマイ)」(マルコ1:41 他)というものでした。自分の意志とは関係なく、お腹がムズムズしたり、妊娠中の女性であればお腹の中で胎児が動いたり、ということなのだと思えます。「憐み」と訳されているヘブライ語の言葉(ヘセド)は、「子宮」や「胎動」と関連する言葉ですから、頭で考えた理屈などを越えて、心が先に感じてしまう、体が先に動いてしまうということ、それを「憐れみ」と言い、「はらわたがつき動かされる」と言ったのだらうと思えます。雲の上のようなどこか遠い所にいて、悠然と地上の人間たちの様子を眺めている神様ではなく、一つ一つの出来事にお腹を痛くしたりしている神様。聖書にはそんな人間臭い神様の姿も書かれています。

さて、今回の聖書の箇所は、いわゆる「愛の賛歌」として、有名なパウロの言葉で、結婚式などでもよく読まれる言葉でした。どんなに優れた能力や知識や様々なものがあっても、「愛が無ければ無に等しい」と言い切る。そして「最も優れた道」であり、決して滅びずに永続する「最も大いなるもの」は愛であると言い切るのは、とても力強い言葉です。特に4節から7節の言葉は、印象的です。「愛は忍耐強い。愛は情け深い。妬まない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、怒らず、悪をたくらまない。不正を喜ばず、真理を共に喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」……。

しかし、これらの力強く美しい「愛の賛歌」を読めば読むほど、私たちの現実とはかけ離れていて、如何に自分が愛の足りない存在かということを感じ知らされます。ここで言われている「愛」、聖書に書かれている「愛」(アガペー)というのは、日本語で言う「大好き」というような、感情的に好きか嫌いかということではなく、「人を大切にすること」です。ですから、相手の性別も年齢も、立場も超えて、相手を大切にすることはできるはずだ、というわけです。とはいえ、そのようなことは頭では分かっている、実際に日々の生活の中で、仕事の相手に対しても、職

場の同僚に対しても、友人や家族に対してさえ、本当にいつも相手を大切にすることができているか、これらのことを実行できているかと問われると、できていないことの方が多いのではないのでしょうか。そして恐らく、それは自分一人だけに限らず、また現代だけに限らず、ずっと昔から、ほとんどの人がそうだったのではないかと思います。

この「コリントの信徒への手紙」は、パウロがコリントの教会の人々に宛てて書いた手紙です。当時のコリントの教会には、様々な考えの人たちが集まっていて、パウロと異なる意見を持った人も大勢いたようです。そしてパウロはこの手紙の冒頭で、「どうか、皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一つにし、思いを一つにして、固く結び合ってください」(1:10)と言い、分裂と争いを止めて、教会の一致を促すために、この手紙を書きました。そしてそのための「最高の道」として述べられているのが、この「愛の賛歌」です。しかし、この手紙を書いたパウロ自身が、この通りに実践できていたかという点、それも怪しく、パウロの女性や一部の人々に対する差別性も、その手紙の中にはいくつも見られています。またこの「愛の賛歌」自体が、人を差別し、抑圧する暴力に加担し、利用されてきたことも歴史的事実です。

と言いますのも、この「愛の賛歌」というパウロの言葉、聖書の言葉は、先に結婚式の際によく読まれると言いましたが、真面目な人ほど、夫婦の関係において、家庭の中において、この聖書の言葉の通りに実践できていないことに悩まれるのではないかと思います。相手を愛せていない自分、相手のことを大切にできず、忍耐しきれず、情け深くいられず、妬んでしまい、怒ってしまう、など……。そのような時に、それは自分の能力が足りないからだ、努力が足りないからだ、信仰が足りないから、祈りが足りないから、そうになってしまうのだ、と自分自身を責めてしまうということはないのでしょうか。とりわけ、女性の側がこの聖書の言葉を引き合いに出されて、「聖書にはこのように書かれているのだから、あなた自身もこのようでありなさい」と言われて来た歴史が長かったのではないかと思います。そしてそれは多くの場合、DVとして身体的暴力や精神的暴力を伴ったり、モラルハラスメントとして執拗に自分自身を束縛し、抑圧して来たりしたのではないのでしょうか。

フェミニスト神学者のエリザベス・シュスラー・フィオレンツァ(1938-)は、この言葉に対して、次のように述べています。

「パウロの愛の賛歌に反対して、私は言います。愛はすべてに耐えたりはしません。愛は、不平等・不正・暴力・虐待・人間性の剥奪を受け入れません。忍耐しません。愛は、もしそれが自己価値・敬意・尊厳・独立・自己決定の表現でないならば、危険なものです。愛は……正義がないなら、無に等しい。……そうです、愛は全てに耐えてはならないのです」(山口里子 2013 『いのちの糧の分かち合い』195 頁)

「愛」「人を大切にすると」は、自分のことを顧みず、二の次にして、自己犠牲でひたすら相手に尽くすことではありません。聖書の中で何度も述べられているいわゆる「隣人愛」の教え、「隣人を自分のように愛しなさい」(マルコ 12:33)は、「自分自身を大切にするように、人を大切にしなさい」ということです。「自分を大切にせず、人のことだけを大切にしなさい」ということではありませんし、自分自身が大切にされておらず、安心も安全もないような状態では、決して隣の人、目の前の相手を、大切にすることはできないのではないかと思います。

3 節の言葉「また、全財産を人に分け与えても、焼かれるためにわが身を引き渡しても、愛がなければ、私には何の益もない」にもあるように、「全財産を人々の炊き出しのために注ぎ込み、自分自身を投げ出して、それを誇ったとしても、人と自分を大切にできないなら、何も得るところはありません」ということなのでしょう。

「人と人をつなぐもの」……。それは使い古された陳腐な言い方になりますが、「気持ち」や「真心」、お互いに「相手を大切にしたいという思い」なのではないかと思えます。そしてそれは自分自身を卑下したり、抑圧したりする中からは生まれません。「人を大切にする心」は神様によって私たち一人一人の内に与えられています。そして、それによって私たちが互いに大切にし合う中に、神様も共にいてくださいます(1ヨハネ4:16)。私たちがつながり合える人々、世界は限られていますが、それでも今自分が置かれて生かされているこの場所から、神様と共にあって、私たちは今日も隣の人と、目の前の人とつながっていきたい、人と自分を大切にしていきたい、そのための歩みへと押し出されていきます。